

# 身体表現活動を取り入れた拍感の体得をめざす試み

－小学校低学年の音楽科授業を通して－

時得 紀子\*・信谷 準\*\*

## 1. はじめに

現代の子どもたちはマスメディアを通じて、既に幼少時から多様なジャンルの音楽に親しむ機会に恵まれている。さらにこれらの映像を通じて、子どもたちが音楽と共にさまざまな躍動感あふれるダンスに親しむ機会も、ひと昔よりも格段に増えている。今日では、若者の間で人気を博すヒップ・ホップなど多彩なジャンルの踊りを子どもたちを対象として指導するダンス教室も、都会や地方を問わず町のあちこちで見られるようになって久しい。

もとより、世界各地の諸民族の音楽を見渡しても明らかなように、歌唱ひとつを例に挙げても、労働歌や豊作を祝う歌など、古来より人々は音楽と共に踊り、音楽と動きをごく自然に一体化させた表現を伝承してきている。しかし、我が国の学校音楽においては、本来踊りと共に歌われてきた民謡などでさえも、あまりにも動きと音楽を切り離して扱ってきたといえるのではないだろうか。音楽だけを西洋クラシック音楽の五線譜によって教科書に記し、その一方で踊りをそぎ落とし、歌う活動のみを教材の中心に据えることは、音楽文化の真正な伝承という視点からも、今後改善されるべき学校音楽の課題のひとつであると捉えている。

今日、子どもたちはひとたび校門を出ればテレビ番組などのメディア情報をふんだんに受けて、ポピュラー音楽を歌いながら踊るといった表現に日頃から親しんでいる。学校音楽においても、楽曲に合わせた身体表現活動を活かし、子どもたちに音楽の持つ多様な要素を丸ごと享受させることは、むしろ積極的に探究されるべきであろう。そして、そうした指導法の開発にとって、今回の学習指導要領の示す新しい動向はこの実践を後押しする内容に移行してきている。本論ではこうした学習指導要領の指針を踏まえながら、さらに具体的な授業実践を試みるものである。

## 2. 学習指導要領の改訂と身体表現活動について

折しも今次の指導要領改訂では、身体表現活動を広範囲な音楽活動に導入する方向の新たな提言がなされている。その例として、平成20年3月に告示された、小学校学習指導要領 第6節音楽の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」を読み解いていくと、「各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかかわることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること。」と明記されている。この記述から、従前は表現領域のみに限定されていた「身体表現」が鑑賞の領域にも新たに拡大されたことがわかる。さらに、「身体表現」の活動が示す内容も、「体を動かす活動」と広義に捉えられており、これまで以上に幅広く体をつかった表現活動の探究を促すことが示唆されている。

加えて、平成20年8月に発行された、小学校学習指導要領解説 音楽編における低学年の歌唱活動においては、次のような記述が見られる。「指導に当たっては、体の動きを伴った活動や互いに聴き合う活動など様々な活動を行う必要がある。」また、同じく低学年の音楽づくりの項目において、「音遊びの例としては、(略)自分の体を使って出せる音などから気に入った音を見付ける遊び、体の動きに合わせて声や音を出す遊びなどが考えられる。」と記されるなど、現行学習指導要領と比較すると、体を動かす活動に関する記述が改訂後において、重視されてきていることが顕著である。

もちろん現行学習指導要領においても、特に曲想や要素、楽曲の構造の特徴を感じ取るための有効な活動として、身体表現は重視されていたが、今回の改訂を機にこれまで以上に体を動かす活動を取り入れることで、子どもたちがより想像力を働かせ、音楽と主体的にかかわることを促すための指導をめざして、表現領域のみならず、鑑賞の活動にも掲げられているのである。これを受けて本論では、学校音楽の音楽学習のプロセスにおいて、身体表現活動をこ

れまで以上に取り入れるためには、どのような試みが有効であるのかを探ろうとするものである。具体的には学校音楽の低学年の児童に身体表現活動を導入していくその手立てとして、どのようなアプローチが子どもたちに有効なのか、授業実践を通してその効果的な指導のあり方、さらには実践上の課題についても探ろうとするものである。

本授業で実践の対象とする低学年に関する指導では、新学習指導要領に新設された「共通事項」も参考とした。取り分け、表現活動及び鑑賞活動において共通に必要な能力を示した、この「共通事項」の第1学年及び第2学年の「内容」に記載されている、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素などについて、表現及び鑑賞の活動を重視することを指導の目標に掲げた。

子どもたちが生き生きと拍感を捉えながら、歌唱活動を始めた諸活動ができるようになることをめざす時、例えば子どもたちに2拍子や3拍子の拍感を体得させる上で、どのような指導法がより習得の効果をあげることができるかなどについて、主として児童の授業中の活動のパフォーマンス評価から見取することに努め、その成果と課題を探ることとした。

本研究における実践に際しては、小学校低・中・高学年の中で最もリズム活動の習得に重点が置かれていると考えられる、低学年段階の児童を対象とした。また、授業後の成果と課題についての考察においては、今次改訂で示された新しい視点なども参考として検証を試みた。また、本授業実践は同じく平成20年度内にさらに5年生においても試み、同様の成果が確認されたが、紙幅の都合上から本論においては、低学年の2年生を対象とした授業実践にのみ焦点を絞ってまとめた。これらの授業実践には筆者の信谷が指導者としてかかわった。信谷はこの授業実践に臨むまでの2年間に新潟県内で開催された、保育者らを対象としたリトミック講習会への参加を継続してきていた。そして、これらの実践的な講習会を通じて学んだ指導事例を本授業に活用した。

### 3. リトミック講習会から学んだ拍の指導法

信谷は、平成20年5月25日に新潟県長岡市の私立T保育園を会場とした、リトミック講習会に参加した。指導講師は国立音楽大学講師の馬淵昭彦氏（以下講師と記す）であった。この講習会において、本授業実践の指導の根幹を成す、拍感の体得について、リトミックの学習においても重要な、「ビートとパルスの違い」についての講義から指導法について、具体的には主として次の1)と2)に示すような理論を学んだ。これらの理論はいずれも後述する低学年児童の子どもたちへの指導法を考案する際に多くのヒントを得ることができた。次に、本講習会において講師から学んだ、拍感についての指導法の要点を以下に掲げる。

- 1) 拍を意味するビートは、拍までの準備、拍点、跳ね返りの繰り返しから成り、拍点と拍点の間を拍間という。一方、電子メトロノームのような人工的に作られたものによく見られ、拍間に準備、跳ね返りがないものがパルスである。すなわち、拍間に準備、跳ね返りがあるものがビートで、それらが無いものがパルスである。この他にパルスの例としては、高層ビルなどの建造物に設置されている航空障害灯などが挙げられる。
- 2) アナクルーシス、クルーシス、メタクルーシスという3つの拍の流れについて。まず、「アナクルーシス」とは拍までの準備段階を指す。「クルーシス」とはアクセントの置かれる位置であり、拍の動きの結果生じた拍点を指す。最後に「メタクルーシス」とは跳ね返りであり、余韻を意味する。以下に拍のエネルギーの移動の流れについて、図1に示す。これらを火山に例えると、マグマの状態がアナクルーシスに、噴火がクルーシスに、流れ出る岩石などがメタクルーシスに相当するという。この3つを意識しながら拍を表現することが大切であり、これによって拍の流れを身体全体で感じ、体得することにつながるため、歌唱、器楽など音楽全般にわたって表現が豊かになる。

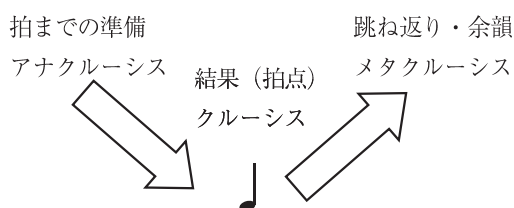


図1 拍の流れについて

- 3) 講師が弾くピアノ伴奏のテンポに合わせて、同時進行で講師が言い表す拍数の数字が表すフレーズの空間を両手で表現しながら最初のリズムを手で打つ。その際に講師が言う数字は、1 フレーズ内の音符の数を指している。例えば講師が4と言うと、1, 2, 3, 4と言いながら1の拍で手を打ち、体の正面に2, 3, 4と両手で円を描き、次のフレーズの拍の頭でまた手を打ち、同様に円を描く。これを、講師が次の数字を言うまで繰り返す。拍の数が8拍など多くなるほど描く円も大きくなり、逆に2拍子など少なくなるほど描く円も小さくなる。
- 4) 両足が入るくらいの大きさのカラーマットを、1人1枚床に置きその上に乗る。そこから、講師が叩く木琴のリズムに合わせて、目的地に定めたマットに何歩で行けるかを予想して、その予想した歩数で歩いてみる。これに加えて、フォルテ(f)、ピアノ(p)を区別して歩く。フォルテの場合は力強く歩くことを、ピアノの場合は弱く歩くことを意識する。

これら1) から4) までの講師が示した、拍を体得させるための具体的な指導法は、実際の空間に自らの体を解放して、手拍子や足拍子でリズムを刻むというもので、いずれも子どもたちに体感を通した学びを提供できるものである。そしてこのような具体的な実践のすべてが身体感覚、視覚、聴覚、触覚を駆使した活動であるだけに、大人以上に低学年児童には、理屈抜きに音楽の諸要素、拍の構造を体得させることに有効であろうと捉える。

筆者の時得もこれまでに国内のさまざまなリトミック講習を受講しており、さらに米国においてもリトミックの著名な指導者、ロバート・エイブラムソン氏による指導法を大学院の講義及び夏期講習において受講してきた。こうした経験からも、リトミックが重視する、音楽そのものに全身の感覚で触れながら、その諸要素を体得していく学習方法を我が国の学校音楽にも積極的に導入することは、今日の時代の要請からも急務であることを実感している。

#### 4. リトミックを取り入れた授業実践のねらい

前述のさまざまな指導法を参考としながら、本論では小学校における授業実践を試みるに当たり、学習活動のねらいについて次の4つのねらいを掲げた。これらは子どもたちに培いたいと考える力でもある。なお、本論の授業実践後の考察の記載においては紙幅上の都合から、全6時間の活動のうち、6時間目の実践に焦点をあてて掲載した。

また、この全6時間の活動においては、身体表現活動を効果的に生かすことで、次の4つの活動を充実させることをめざすものである。

- ① 拍子の流れを感じ取り、楽しんで身体表現しながら聴く。
- ② 2拍子、3拍子の特徴を身体で感じ取る。
- ③ 楽曲の特徴を身体で感じ取りながら表現する。
- ④ 心の中で拍子の流れを感じ取りながら歌唱する。

本授業の学習指導のねらいを示すと、次の図のようになる。

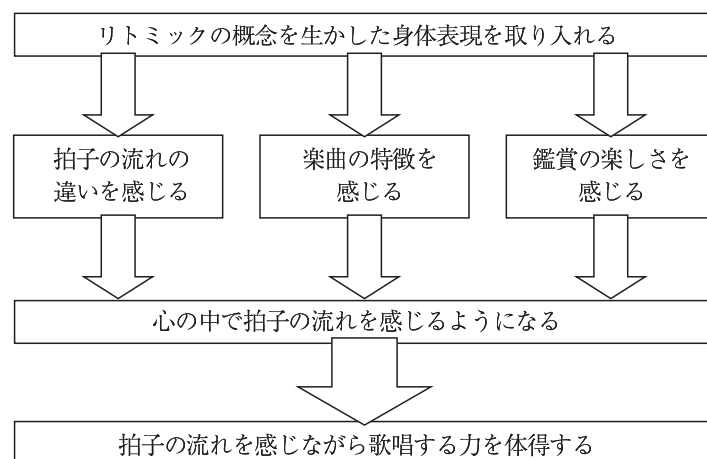


図2 本授業のねらいの関係図

この「リトミックの概念」は、スイスの作曲家であり音楽教育にも大きな影響を与えた、エミール・ジャック・ダルクローズ（1865－1950）によって考案された。このリトミックの実践の中で、本論が取り上げるアプローチは、我が国の子どもの音楽指導に携わる先生方を対象とした講習会でもしばしば紹介されており、学校音楽で効果をもたらすと考えられるリトミックの指導法の一部を活用したものである。次に筆者がリトミック講習会から体験を通して学んだ指導法の事例を取り上げ、本論での小学校低学年児童への授業実践のねらいにも関連させながら触れていきたい。

まず、身体表現を取り入れた授業を行うことで、2、3拍子の違い、楽曲の特徴、鑑賞の楽しさを子どもたちが感じることができるように導いていくことをめざす。このアプローチによって、心の中で拍子の流れを感じ取る感覚を培い、拍子の流れを感じながら歌唱する力を身につけさせることをねらうものである。

先述の全6時間の授業実践のねらいで掲げたそれぞれの活動のねらいのうち、最初に掲げた「① 拍子の流れを感じ取り、楽しんで身体表現しながら聴く。」は、鑑賞についてのねらいである。我が国における鑑賞の授業は、まず楽曲を聴き、その後に聴取して感じたことを述べ合うという学習にとどまる実践が多いのではなかろうか。これにリトミックを採り入れることで、さらに楽曲の拍などの特徴を感じ取ることに導かれるものと捉える。次に述べるように、筆者が受けた講習会における実践からは、こうした指導法のヒントを探ることができる。

- 1) まず、講師がCDを用意していた既成の楽曲を受講生が数回聴き、曲を聴いて感じ取った特徴、印象などについて、グループ毎のメンバーの間で互いに言葉によってイメージを交換し合う。その後に、それらの言葉の交換からさらにイメージをふくらませ、再度楽曲を聴きながら各々が身体表現する活動を試みる。

このように仲間と言葉によるイメージの交換をした後には、さまざまな身体表現が工夫され、表出していたため、子どもたちにも、歌詞の吟味や楽曲の情景をイメージする活動事例として参考となった。この他にも講習の中で体験した実践では、次の活動が多くのヒントをもたらしてくれた。

- 2) 講師があらかじめ用意したなめらかな感じの楽曲を受講生が聴いた後に、2メートル四方ほどの大きさのカラフルな布を、受講生が数人で持って揺らしながらなめらかな曲を意識してスウィングする。この活動では、受講生が布を媒体として身体表現で再現しながら、聴き取った楽曲の拍やなめらかさを全身で感じ取ることに意識を集中させた。

これによって、聴覚だけではなく視覚、触覚も使いながら、全身で楽曲の特徴を感じ取ることができるのである。そこで、小学生への実践では、教室の中にある遊具などを活かしてこれらのアプローチを試みることにした。

次の「② 2拍子、3拍子の特徴を身体で感じ取る。」のねらいは拍についてである。将来的には中学年、高学年にかけての発展的な活動として、両手で指揮をしながらリズムを足踏みするという活動につなげていくという目標を当初は設定した。しかし難易度を考慮し、低学年の現段階の児童には指揮のみを採り入れ、視覚的に拍子の流れの違いを感じることが出来ることをめざすことにとどめることにした。

「③ 楽曲の特徴を身体で感じ取りながら表現する。」のねらいは、拍子とリズムを身体で感じ取るためのものである。このねらいは、本指導案の要となるものである。具体的には、楽曲に合わせて手拍子を打つ、足踏みをする、タンブリンなどの簡単な打楽器で拍子やリズムを打つ、2・3人組になって手拍子を打ち合う、教師が手打ちをするリズムを当てるなどの取組みを行い、身体全体で拍とリズムを感じ取る感覚を身につけさせるというものである。

同時に、この取組みは楽典の指導にも有効であると考ええる。例えば、四分音符と八分音符の音の長さの違いを学習する際に、黒板に音符の図を貼り、指導者が口頭で説明するよりも、実際に手拍子を打ったり、足踏みを指導者のリードと共に試みることで、少しでも両者の音の長さの違いを感じ取りやすくなるよう配慮することにした。

また、低学年の児童は、楽器を使った活動に対して高い関心を示すため、タンブリンやカスタネット、木琴など、簡単に演奏できる打楽器を効果的に組み込みながら、拍子打ちを行うことを心がけた。

最後に掲げる、「④ 心の中で拍子の流れを感じ取りながら歌唱する。」のねらいは、①・②・③のねらいのまとめとなるものである。リトミックの学習では、筆者らが講習会においても学んだ、「内的聴取」と呼ばれる、学習方法を導入した。英語圏では「インナー・ヒヤリング」と呼ばれ、音楽を心の中でも聴くことをめざすアプローチである。すなわち、音の実際に聴こえてこない環境でも、心の中で拍を打ち続けるイメージを持つことが重要となる。このイメージとは、それまでに行ってきた手拍子や足踏みなどを、実際の行為は行わずとも心の中で拍を取る活動を想像す



ることを意味している。最終的には、楽曲のイメージを持つ習慣を子どもたちにつけさせ、実際に歌っている間も、自然に拍子の流れを心や体で感じながら歌唱する力を身につけることをねらうものである。

## 5. 学習指導案（第2学年）の概要

### 1) 題材名 歌に合わせてダンスダンスレボリューション

教材曲 「トルコ行進曲」「メヌエット」「いるかはざんぶらこ」  
「山のポルカ」「ピラミッドのうた」「虫のこえ」

### 2) 題材について

#### ① 教材選択の観点から

本題材では、2, 3拍子の流れに合わせて身体表現をしたり、歌詞の表す情景や楽曲の気分をより良く感じ取り、拍子の流れを感じながら歌唱することをねらいとしている。

「トルコ行進曲」「メヌエット」は、曲に合わせて歩いたり走ったり、またダンスをすることで、リズムカルな拍の感じとなめらかな拍の感じの違いから、拍子の違いを感じ取ることに適している。まさに、楽曲の特徴を身体全体で感じながら聴くことができる教材である。この2曲を手拍子や足踏みなどの身体表現をしながら聴き比べることで、2, 3拍子の流れの違いを感じ取ることができる。

「いるかはざんぶらこ」は、フラフープを使って3拍子に合わせてケンケンパをすることで、1拍目の四分休符を意識しながらのびのびと歌唱できる教材である。「ピラミッドのうた」は指揮をしながら歌うことで、3拍子をイメージしながら、のんびりと砂漠を進んでピラミッドを発見した時の喜びを感じることができる教材である。このピラミッドの三角の形をイメージしながら、3拍子の指揮を振ることで、3つの拍点を視覚的に理解することができる。

「山のポルカ」はタンブリン、トライアングル等の楽器を使って、弾んだ感じの2拍子の流れを身体全体で感じることができる教材である。また、低学年の児童は楽器に大変興味を持っている。そのため、簡単な打楽器を使って演奏することで、手拍子や足ふみとは違った感覚で2拍子の流れを感じ取ることができる。

「虫のこえ」は、音符、休符の特徴を身体で感じさせたり、虫の姿をイメージしたりしながら楽しんで身体表現することで、歌詞の情景を想像しながら歌唱することができる教材である。また、「山のポルカ」とは違う、なめらかでしっとりとした感じの2拍子の流れを感じ取ることに適している。

#### ② 児童の実態から（男子7名、女子5名、計12名）

歌う際の子どもたちの顔の楽しい表情から、全体的に歌うことが好きだと思われる児童が多い。歌詞の情景などを積極的に想像しながら表現しようという姿も見られる。これらに加えて、楽曲の拍子の流れの特徴を意識しながら表現することが出来れば、さらに美しい表現が可能になると考える。

そこで、本題材では音符、休符の長さを手拍子、足踏み、カスタネットなどの簡単な打楽器で表現して、音符、休符の特徴を身体で感じさせることを目標に掲げた。また、フォルテ、ピアノの違いを手拍子、足踏みに強弱をつけて表現することで感得させていく。これによって、それぞれの鑑賞曲、歌唱曲の特徴を感じながら聴いたり、表現する楽しさを感じさせることができるものと捉える。

#### ③ 題材のねらい

- 2, 3拍子の流れの違いを感じ、楽しんで身体表現をしながら聴くことができる。
- 2, 3拍子のそれぞれの流れの特徴を身体で感じ取ることができる。
- 楽曲の特徴を身体で感じ、表現することができる。
- 心の中で拍子の流れの特徴を感じ取りながら歌うことができる。

本題材では、まずCDで「トルコ行進曲」と「メヌエット」を鑑賞し、楽曲に合わせて行進、ダンス等の身体表現をすることで、リズムカルな拍子の流れの感じ、なめらかな拍子の流れの感じの違いに気づくようにする。

次に、「いるかはざんぶらこ」「ピラミッドのうた」を使用し、3拍子の拍の頭の1拍目をイメージできるようにする。ここでは、楽曲に合わせてフラフープをつかってケンケンパをする活動や、カスタネットを使い1拍目を打つ、指揮をするなどの活動を通して3拍子の感じを身体全体で感じさせる。

さらに、「山のポルカ」の楽曲からは、2拍子の感じを身体で感じさせる。教師のタンバリンを用いた拍子のカウントに合わせて、マリンバを叩くグループ、休符をタンブリンで打ちながら、足踏みをするグループに分かれ、妙高

山でポルカを踊るイメージを持たせながら2拍子の感じを身体全体で感じさせる。

最後に「虫のこえ」の楽曲を使い、それぞれの音符、休符の特徴を身体で感じさせる。また、虫の鳴き声を身体やカスタネットなどの小さな楽器を使って、イメージできる虫の姿を表現をしながら、また、歌詞の情景が想像できるように歌唱をする。

これらの多様な楽曲に親しむ活動を踏まえて、各々の拍子の流れの特徴を感じ取りながら、歌うことができる力を身につけさせたい。

### 3) 評価規準

音楽への関心・意欲・態度①	楽曲の特徴を身体で感じ取りながら、楽しんで表現しようとする。
音楽的な感受や表現の工夫②	それぞれの拍子の流れの特徴を身体表現することで感じ取り、歌唱の表現の仕方を工夫する。
表現の技能③	拍子の流れの特徴を感じ取りながら歌うことができる。
鑑賞の能力④	拍子の流れの違いを感じ、身体表現しながら聴く。

### 4) 題材の指導計画

次	時	学習内容	評価計画
1	1	・「トルコ行進曲」と「メヌエット」を身体表現しながら鑑賞する。 ・2曲の拍子の流れの特徴を発表する。	①身体表現をすることで、拍子の流れの違いを感じ取っているか。 ④拍子の流れの違いを感じ取って聴いているか。
2	2	・「いるかはざんぶらこ」を聴きながら、フラフープを使ってケンケンパをする。 ・いるかが泳いでいる情景を想像しながら歌う。	①楽曲に合わせて身体表現し、楽しく歌唱しようとしているか。 ②3拍子のリズムに合わせてケンケンパできるように工夫しているか。 ③3拍子の特徴を身体全体で感じ、情景を想像しながら楽しそうに歌っているか。
	3	・足踏みとカスタネットを使い「ピラミッドのうた」に合わせ拍子打ちや指揮をする。	③3拍子の拍の頭をイメージして、リズム打ちをしたり、歌おうとしているか。
3	4	・「山のポルカ」に合わせて、木琴やタンブリンを使って拍子を演奏する。 ・手拍子を打ちながら歌う。	①楽曲に合わせて身体表現し、楽しく歌唱しようとしているか。 ②2拍子の特徴を身体全体で感じ取り、楽しくリズム打ちをしているか。
	5	・音符、休符の特徴をリズム当てゲームを通して感じ取る。	②それぞれの音符、休符の特徴を身体全体で感じているか。
	6	・「虫のこえ」をリズムよくのびのびと歌う。	③拍子の流れの特徴を心の中で感じ取りながら、のびのびと歌っているか。

### 5) 第1時から第6時までの授業とそのねらい

全6時間の授業のうち、5時間目までの各学習指導案の記述などについては、紙幅の都合上割愛する。次に、第1時から第6時までの各授業の実施日時や、主なねらいを①および②に簡潔にまとめたものを以下に掲げる。

#### (1) 第1時の実践

実施日；平成20年9月8日月曜日 時間；午前9：30～午前10：15

場所；新潟県M市立A小学校音楽室（2回目以降も同じ。）

① 身体表現をすることによって、2，3拍子の流れの違いを感じながら楽しんで聴く。

② 本時は、ベートーベン作曲「トルコ行進曲」、ヘンデル作曲「メヌエット」を使って、それぞれの楽曲に合わせて身体表現することで拍の流れの違いの体得をめざす。

#### (2) 第2時の実践

実施日；平成20年9月11日木曜日 時間；午前9：30～午前10：15

- ① いるかになりきって歌唱し、3拍子の楽曲の特徴を身体で感じ取ることができる。
- ② 本時は、「いるかはざんぶらこ」を使って、3拍子の流れの特徴を身体全体で感じ取り、それを生かして歌唱することをめざす。

(3) 第3時の実践

実施日；平成20年9月17日水曜日 時間；午前9：30～午前10：15

- ① 指揮をすることで指揮の役割について知り、3拍子の楽曲に親しむことができる。
- ② 本時は、「ピラミッドのうた」に合わせて指揮をしてみることで、指揮の役割について知り、3拍子の楽曲にさらに親しむことをねらいとする。

(4) 第4時の実践

実施日；平成20年9月19日金曜日 時間；13：55～14：40

- ① 楽曲に合わせて身体表現したり、楽器を演奏したりして、2拍子の流れの特徴を感じ取って歌うことができる。
- ② 本時は、「山のポルカ」を使って、前時までの楽曲に合わせて身体表現する活動に加え、楽器演奏を伴い、2拍子の流れの特徴を感じ取りながら歌うことをめざす。

(5) 第5時の実践

実施日；平成20年9月22日月曜日 時間；午前9：30～10：15

- ① それぞれの音符の長さの特徴を身体全体で表現できる
- ② 本時は、リトミックを使って、四分音符、四分休符、八分音符、八分休符の長さの特徴を理解することを目的とする。このことを通して、歌のリズムに乗って歌いやすくなり、虫が飛んで鳴いている様子を表現できることをめざす。

(6) 第6時の実践

実施日；平成20年9月24日水曜日 時間；午前11：25～午後12：10

- ① 拍子の流れを身体の中で感じ取りながら、のびのびと歌うことができる。
- ② 本時は、これまでの授業のまとめとして、拍子打ちをせず、楽器を使わずに、自分の身体の中で拍子の流れを感じながら、歌の情景を想像して、のびのびと歌うことをめざす。

## 6. 第6時授業実践について

### 1) 第6時の主な学習活動

- ・黒板に貼ってある歌詞カードを音読する。その後、どんなイメージを持ったかを班毎に発表し、それぞれに歌のイメージを持たせる。
- ・最初の6小節から歌の練習をしていく。練習を始める前に、前時に行った音符の長さを足踏みしながら表現できるように、四分音符、八分音符を使い前時の復習をする。
- ・練習の中で、リズムが取りにくい箇所があれば、手打ち、足踏みを行うことで支援しながら、身体の中で拍を感じることを意識させていく。
- ・ある程度歌えるようになったら、班毎に発表する。さらに、歌唱しながら、5、6小節の目の箇所て意図的に入れる鳴き声の表現の仕方を班毎に考える。
- ・まとめに、互いの演奏を聴いた感想、自らの演奏の感想などを互いに発表し合う。

### 2) 第6時の授業実践後の考察

前時に行ったリズム当てゲームのおさらいとして、①のカード（♪♪）、②のカード（♪♪♪）③のカード（♪♪）、④のカード（♪♪）を使って、手拍子と身体の部位を叩くことでそれぞれのリズム打ちを行った。まず、授業者が見本を見せて行い、それを見て児童にリズム打ちさせる。児童は、四分音符と八分音符の音の長さの違いを明確に手拍子で表現しており、リズム当てゲームの効果はあったと感じた。しかし、上手く打てない児童に対しての支援が出来なかったため、代表の児童にリズム打ちをしてもらい、上手く打てない児童の側で授業者と一緒にリズム打ちするなどの支援が必要であった。また、友だち同士で教え合うようにさせる支援も考えられたが、その際の効果的な方法を準備していなかったため、行うことが出来なかったことも課題となった。

タンブリンで拍子を叩きながらア・カペラで指導した「虫のこえ」の歌唱練習では、児童の顔の表情を見ながら指

導が出来たため、一人一人の児童に対して助言を行うことができた。また、自然に身体を上下させたり、手拍子を打ちながら拍子の流れを意識して歌う児童の姿が見られたことは、本論のめざす成果が得られたものと捉えることができた。

一方で、ピアノなどの楽器による伴奏があった方が歌いやすいという児童の意見もあり、楽器による伴奏と共に歌いたいという児童の希望も強いことがわかった。そのため授業者は、ピアノに限らず、何らかの楽器を使ってある程度巧みに伴奏できる技能を身につけることが望ましいと感じた。その際、児童の様子や顔の表情などを観察しながら伴奏することで、同時に拍子の流れを感じさせるための支援にもつながると考えられる。

班ごとに歌の発表を行う場面において、「虫のこえ」の鳴き声を歌う4小節の箇所においては、なるべく楽器は使わずに手拍子や身体部位を叩くといった、身体の動きを伴う表現を児童に促した。これは第4時の授業において、児童に楽器を与えたために演奏に集中しすぎ、拍子の流れを感じ取るどころではなかったという経験を生かしたものである。その際の経験から、今回は楽器は鈴やタンブリンまでにとどめた。

歌の発表の場面では、自然と身体を上下させたり手拍子や足踏みをしなが、拍子の流れを感じ取ることを意識しながら歌う児童の姿が見られた。このことから、手拍子や足踏み、身体部位を叩くことを使った活動は、拍子の流れを感じ取るための手段となる可能性を見出すことができた。しかし、毎時間の繰り返しによって、この取組みに興味を示さなくなった児童の姿も見られたため、手拍子や足踏み、身体を叩くことに加えて、さらに指導法をそのつど工夫し、臨機応変に導入していくことの必要性が認められた。また、拍子の流れを意識しているかどうかを見取することは、児童へのパフォーマンス評価からだけでは難しいととらえ、授業後に児童に対して次の質問項目によるアンケートを行った。

- 質問① 歌に合わせて手拍子を打つことができましたか。  
 質問② 「虫のこえ」を手拍子や楽器を使って表現できましたか。  
 質問③ 以前と比べ楽しく歌を歌うことができましたか。

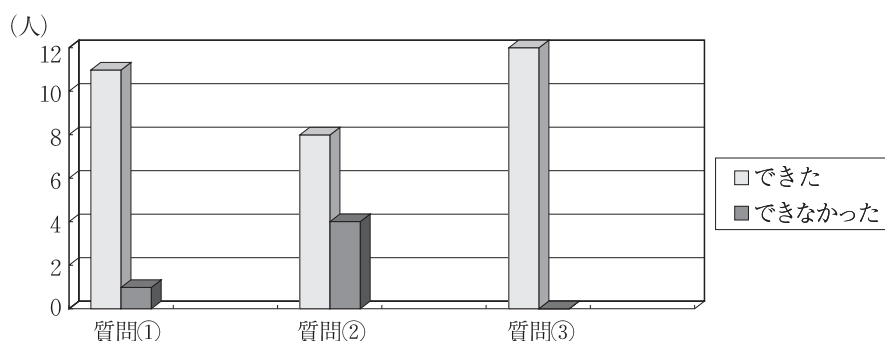


図3 子どもたちの授業後の意識を問うた結果を示すグラフ

このグラフに見られるように、①の質問においてはリズムで多く用いられる手拍子を使ったリズム学習は、低学年の児童が楽しみながら学習することができる活動であることが認められた。次に②の質問の結果から、手拍子や身体部位を叩くことを使って拍子を感じ取る方法は、「虫のこえ」の学習の時間においても有効であったと考えられる。しかし、逆に難しいと感じた児童の意見から、手拍子や身体部位を叩くことへ導く前に、ごく簡単な身体表現活動を取り入れた指導法も開発していく必要があると考えられる。また、この度の実践は全6時間の授業を通じての試みであったが、今後さらに継続して実践することで、拍子の流れを感じながら歌う力を徐々に育てていくことが重要であることがわかった。

質問③の結果からは、歌うことが好きになったという児童の意見を多く得ることができた。質問内容が、拍子の流れを感じ取ることが出来たかを見取るためには適切ではなかったものの、手拍子することや体の部位を叩くこと、さらに簡単な打楽器を使ってリズム打ちすること、指揮をするといったこの度の取組みによって、児童の興味・関心を喚起しながら歌唱力を育むことができた成果と捉える。

この実践を通して、手拍子や指揮を使ったリズム学習を伴う活動を導入することで、拍子の流れを感じ取りながら歌うための有効な手段となることを見出すことができた。取り分け手拍子を使ったリズム学習は、小学校低学年の児



童に対して有効なアプローチであることが児童へのパフォーマンス評価などからも認められた。

## 7. 今後の課題と展望

今次改訂された新指導要領改訂でも随所で強調されているように、グループ活動により仲間とかかわり合いながら学ぶという取組みは、PISA調査の枠組みの基本概念であり、OECDの「キー・コンピテンシー」とされる、人間関係形成能力と自律的に行動する能力の育成にも掲げられていることから、今後ますます開発されていくべき実践であるといえよう。

冒頭でも述べたように、現行のものと比べて、新しい、小学校学習指導要領解説 音楽編においては、さらに体を動かす活動のねらいが明文化され、今後こうした活動の充実が期待されていることも読み取ることができる。さらに、体育科や総合的な学習の時間といった他教科の小学校学習指導要領解説においても、身体表現活動を導入することを示す記述が見られるようになった。小学校学習指導要領解説 体育編の「表現運動系」の領域として、低学年においては「表現リズム遊び」、また、中・高学年においては「表現運動」で構成しており、「カ 表現運動系」の運動領域の内容を示した次のような記述は音楽科との横断的な連携のアプローチの可能性もさまざまに見出されるものと捉える。

即興的な身体表現能力やリズムに乗って踊る能力、コミュニケーション能力などを培えるようにする。そのためには、児童の身近で関心が高く、具体的で特徴のある動きを多く含む題材や弾んで踊れるような軽快なリズムの音楽を取り上げるようにし、1時間の学習の中に「表現遊び」と「リズム遊び」の2つの内容を組み合わせたり関連をもたせたりするなど、いろいろなものになりきりやすく、律動的な活動を好む低学年児童の特性を生かした学習指導の進め方を工夫することが大切である。

こうした体育科の身体表現の具体的な活動への取組の提案は、音楽の多様なジャンルのリズムに親しませるためにも、児童の好む表現活動を積極的に取り入れるなど、むしろ音楽科にも積極的に取り入れていくべき示唆に満ちているものと捉える。

さらに、今次改訂の中学校学習指導要領解説 保健体育編における「ダンス」の項目では「創作ダンス」「フォークダンス」「日本の民謡」「現代的なリズムのダンス」など舞踊のジャンルも実に多岐に及んで解説が掲げられており、ダンスにかかわる学習の目標及び内容が、実に16ページにも渡って記述されていることは特筆に値しよう。こうした新しい動向からも、体育科においても身体表現活動を生かした取組みが導入されることで、例えば音楽科の音楽様式の違いを踊りの視座からも理解するなど、双方が横断的に学習活動を模索する可能性も生まれてくるであろう。

一方、本論で取り上げた実践を通じて、今後の課題として掲げられるさまざまな改善点も見出された。これらを踏まえ、小学校低学年児童への身体表現活動を取り入れた指導の際に主に考慮すべき事がらとして、次の3つを挙げる。

- (1) 手拍子や身体の部位を叩くことなどを用いたリズム学習を行う際には、児童が拍子の流れをわかりやすく感じ取ることができるように、本論で示したような「布」を活用するなどして、拍のエネルギーの移動を示すことは効果的である。
- (2) 身体表現においては、授業者は児童に対して具体的な動きの見本を示すことで、表現の枠組みの方向性を促すことができる。
- (3) 拍子を感じ取ることを目的とした学習において、楽器を用いる際には、タンブリンなどの比較的簡単に演奏できる打楽器を使うことのみにとどめ、子どもたちが拍感の意識のみに集中できるよう、たくさんの楽器を用いないこと。

以上の課題を踏まえ、今後も児童が楽しみながら拍感について体得できる音楽科指導法の研究について、さらに継続して探究を深めていきたい。冒頭でも述べたように、我が国の学校音楽においては、身体表現の活動を導入しながら音楽の諸要素について学ぶといった実践が充分になされてこなかった経緯がある。それゆえ、欧米では多く見られる、机などを取り払った音楽室の広い空間を音楽に合わせて踊ったり、自由に動く活動、音楽を全身で体感しながら習得できるような指導法はまだ未開発であるといっても過言ではない。

何より身体表現活動を取り入れた楽曲のリズム、拍感を体得する指導法の充実、ひいては音楽学習における歌唱

活動，器楽活動，鑑賞活動といったさまざまな活動の充実にも直結することは明らかであり，こうした意味からも，音楽学習の要となる活動であると捉える。

折しも，今次の改訂で中学校学習指導要領は，「音楽文化についての理解を深める」ことを目標の中に新たに規定した。諸民族によって異なる音楽文化には，当然ながら，あまたの異なる音楽や踊りなどが存在している。こうした多様な音楽文化を幅広い視野から子どもたちが学習していくためにも，小学校低学年の段階から身体表現を生かしながら，異なる様式の幅広い音楽の特徴を体得する基礎を十分に培っておくことは，今後ますます重要になってくるであろう。

## 引用・参考文献

- R.カヴァイエ，西山志風 『日本人の音楽教育』 新潮社 1987
- L.チョクシー，A.エイブラムソン，A.ガレスピー，D.ウッズ著，板野和彦訳 『音楽教育メソードの比較』 全音楽譜出版社 1994
- 熊木眞見子 『創造的に取り組む身体表現』 音楽之友社 1995
- 文部省 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 1999
- B.コナブル著，片桐ユズル訳 『音楽家ならだれでも知っておきたいからだのこと』 誠信書房 2000
- ジュリア.B，ステファン.M著，神原雅之訳 『リズム・インサイト』 西日本法規出版 2002
- 熊木眞見子・中島 寿・高倉光弘 『子どもの豊かさに培う共生・共創の学び 筑波プランと実践』 東洋館出版社 2004
- 『小学生の音楽1～6』 教育芸術社 2005
- 難波正明，小林公江，川口千代 『表現の文化と教育』 オブラ・パブリケーション 2007
- 小学校学習指導要領新旧比較対照表 平成10年版×平成20年版 教育出版 2008
- 文部科学省 『小学校学習指導要領 平成20年3月告示』 東京書籍 2008
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 2008
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 体育編』 東洋館出版社 2008
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』 東洋館出版社 2008
- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』 東洋書房 2008
- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社 2008
- 松本直子 「公立小学校におけるリトミック指導の意義と可能性」『リトミック実践の現在』 日本ダルクローズ音楽教育学会編 開成出版 2008
- 信谷 準 『小学校音楽科におけるリトミック指導の有効性についての一考察～教材作成の試み』 上越教育大学修士論文 2009
- 時得紀子 『教員養成大学における表現活動の実践の試みと課題』 ダルクローズ音楽教育研究 通巻第34号 2009
- 高倉弘光 『音楽力がアップする授業レシピ』 明治図書 2009

## 注

本論は平成19年度から21年度の日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）「日米の小・中学校の総合表現型カリキュラムの開発と評価」（研究代表者：時得紀子）における調査研究の一環を成すものである。